

小ギク栽培におけるキク白さび病の助長要因			
[要約] 小ギク栽培における白さび病の発病は、罹病苗の利用により助長される。苗の罹病は、前作の切り下株に由来する親株が感染源となるため、親株床から徹底した防除が必要である。また、感受性品種も助長要因となるため、作付けを控える。			
茨城県農業総合センター園芸研究所	平成29年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

近年、本県の小ギク産地ではキク白さび病が多発し、問題となっている。ここでは、防除体系を確立するため、現地における白さび病の発生・助長要因を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) キク白さび病は、収穫後の切り下株で発病している場合、採穂時の親株でも発病している（表1）。
- 2) 採穂時の親株で発病している場合、セル苗でも発病している（表1）。
- 3) 罹病したセル苗を定植した本圃では、生育初期から発病したり（図1C）、農家慣行の農薬散布では発病を抑えられない場合がある（図1C、図1D）。
- 4) 発病には大きな品種間差が認められる（図1）。「精はんな」はいずれの圃場でも発病が少ないが、「すばる」は無病のセル苗を定植しても発病する（図1B）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 水戸市、笠間市で小ギクを生産する4生産者を対象に、2カ年に渡り、同一圃場での発病株率の推移について調査した結果である。
- 2) 感受性が低い品種を栽培することで、発病を抑制することが可能である。
- 3) 感受性が高い品種は本病の発生源となる。感受性が高い品種の栽培を中止する場合は、親株として保持せず、完全に破棄する。
- 4) 発病した、収穫後の切り下株や親株、苗は、本病の感染源となるため、可能な限り防除し、発病を防止する。
- 5) 品種の感受性の程度のみによる防除は困難であるため、農薬等による防除と組み合わせる。

4. 具体的データ

表1 収穫後の切り下株及び、次作の親株、苗、本圃におけるキク白さび病の発病状況
(平成28年11月～平成29年6月)

生産者名	親床伏込時の 切り下株の 発病状況 ¹⁾ (11月)	採穂時の 親株の 発病状況 ²⁾ (3月29日)	セル苗の 発病状況 ²⁾ (4月14日)	本圃での 発病程度 ³⁾ (6月15日)
A	—	—	—	少
B	+	+	— ⁴⁾	少
C	+	+	+	多
D	+	+	+	多

1) 生産者からの聞き取りにより、「—」は未発病、「+」は発病を示す。

2) 「—」は未発病、「+」は発病を示す。

3) 圃場を観察した分類で、「無」、「少」、「中」、「多」、「甚」の5水準で評価した。

4) 挿し穂に温湯処理を実施し、防除した。

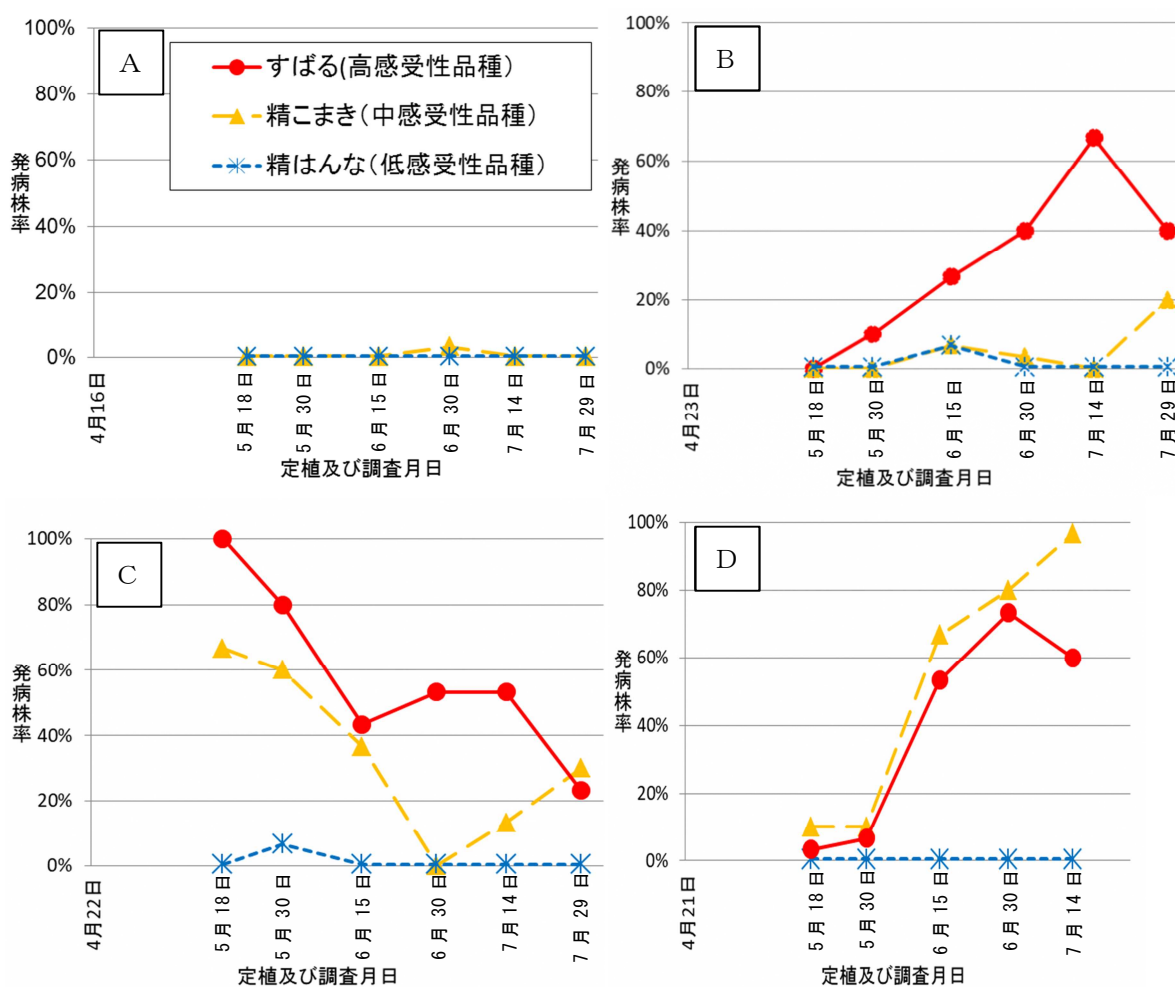


図1 本圃におけるキク白さび病の発病株率の推移（平成29年）

注1) 図中のA～Dは、表1と同じ生産者名を示す。

注2) 白さび病の防除は、各生産者の慣行の農薬散布により行った。

注3) 生産者Dは、7月29日以前に収穫を終えた。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

キク白さび病の多発要因の解明と効果的な防除法の確立・平成27～平成29年度・花き研究室・病虫研究室